●新潟県新潟市立新潟小学校

PISA型読解力の理解促進に、2色プリントを活用して大きな効果。

教育現場では、ＰＩＳＡ型読解力の向上に強い関心が向けられています。新潟市立新潟小学校では、先生方が独自に作成したＰＩＳＡ型テスト問題を２色デジタル印刷機で制作。２色で表現することで子どもたちの問題に対する理解力が増し、結果、学力の向上にもつながっています。

伊藤 充校長

印刷サンプルを分類・整理・分析し、フィードバックする

タンポポ学校の愛称で地域から親しまれている新潟市立新潟小学校（伊藤 充校長）。特別支援学級３クラスを含め22クラス、５６７名の児童が学んでいます。研究助成校として２色デジタル印刷機を導入したのは、平成19年。その動機を伊藤校長が語ります。

「プリントは学力向上や子ども・保護者とのコミュニケーションの核となる存在です。学校のプリントといえばこれまで単色だけでしたが、２色プリントでは赤や青も使える。紙の色の変化も考えれば、色のバリエーションがたいへん豊かになります。これは学力、コミュニケーション力の向上にすごい力を発揮できると考えたのです」

導入後、さっそく栗田貫先生を活用担当に、さまざまな実践活動が始まりました。

あらかじめどのように使うか決めるのではなく、先生ごとに自由に使い方を考えて２色でプリント。印刷サンプルはすべて印刷機の横の箱に残すことにしました。そして、その印刷サンプルを栗田先生が分類、整理。その上で、使い方の情報提供や提案を先生方に行うという方法をとりました。

各教科の教材や学級だより、保健だより、学校だよりなどに２色プリントが広く実践されていきました。そして、そうした中で、「ＰＩＳＡ型のテスト問題に２色プリントを使い、子どもたちの理解をサポートしよう」という試みが進められました。

ＰＩＳＡ型問題をみんなでつくる

ＰＩＳＡ型読解力では、知識の量だけでなく、知識の活用や答えを出すまでの道筋、自分の言葉による表現能力が求められます。

市販のテスト問題では適当なものがないため、問題作成は先生方の「創作」となりました。手分けして文部科学省の全国学力調査（Ｂ問題）などを分析し、討論しながら、独自の問題をつくったのです。

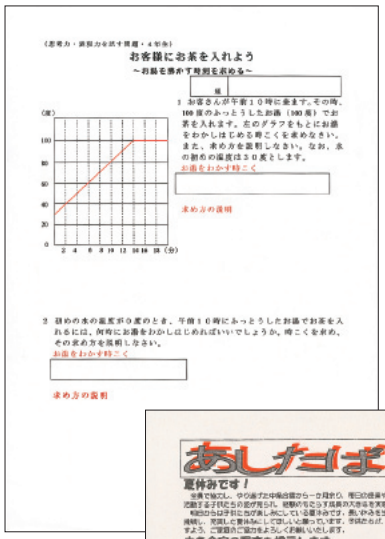
１年生の国語を例にすれば（作例参照）、新潟小学校に転校してくる子どもからの手紙を読み、問題に答える形式です。問題一では、選択式で手紙の内容を問います。同二では、転校生の聞きたいことに作文で答えます。

問題は子どもの学力などに応じて３種類用意しました。

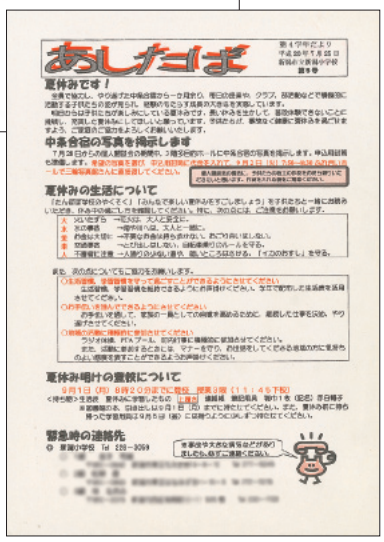
作例（左ページ①）のように１色プリントでは問いのポイントがなかなか分からない子どもも、作例（左ページ②）のように、ポイントが赤でプリントされていると理解が速くなります。

さらに、作例（左ページ③）では、転校生の手紙の一部分（転

栗田 貫先生



４年生の「思考力・表現力を試す問題」



学年だよりなどにも２色プリントを活用

先生方がオリジナルで考えたＰＩＳＡ型問題（１年生国語）

校生が聞きたいこと）を赤でプリントしています。手紙をよく読みこめない子どもに、この部分に着目するよう、サポートしているわけです。

「１色だけではこの試みが不可能です。２色プリントの活用で、初めて狙いに合った問題をつくることができました」（栗田先生）

「こうしたテストを繰り返すことによって、必要な情報を取り出す、情報を解釈する、表現をする、という力が身につくと思います」（伊藤校長）

「分ける」ことから「分かる」へ

当校では、２色プリントを活用するようになって、確実に学力の向上が見られるとのこと。

また、児童へのアンケートでは、多くの児童から「２色プリントになってやる気が出た」の声が聞かれました。

変化は、子どもたちだけではありません。学ぶべきポイントを赤（あるいは青）で示すことで、教える先生の側もその部分をどこにするか、考えるようになって、このことも大きな効果だと伊藤校長は言います。

「先生がポイントを自覚して教えるので、子どもたちの理解も速いのです」（伊藤校長）

また、たとえば白地図の特定の部分を赤にして子どもたちに配り、『この赤の部分はなんでしょう』と、すぐに『子どもに考えさせる発問』に入ることができるのも２色プリントのよさと言います。

「分かることは分けることからきています。なぜ色を分けているんだろう、と考えることから、分かるにつながります。２色を使うことには、そういう面でも大きな意味があると思います」（伊藤校長）

新潟市立新潟小学校